校内研究　研修会　　２０２１．４．５

「学び合う学び」とは

☆『一人ひとりの学びを保障する』☆

※「学び合う教室文化」が育った教室

（「学び合う教室文化」をすべての教室に　古屋和久）

・教室のすべての子どもたちが夢中になって学ぶ教室

・教室のすべての子どもたちが、互いに心を開きながら協同的に学ぶ教室

・教室のすべての子どもたちに、さまざまな「力」が育つ教室

・教師や保護者、教室を訪れるすべての人々がいつでも「学ぶ」ことができる教室

子どもたちは･･･

☆「ひと」と交わることが上手になる

困っている仲間がいれば、一緒に寄り添おうとする。

自分一人で解決できない問題に直面したとき、仲間と一緒に解決していこうとする。

「支え合い」「高め合う」関係を築き、そのことに喜びを感じることができる

→わかった子がわからない子に教える「教え合い」ではない

友だちに教えたり、一緒に考えたりしていくなかで、新しいことに気付いたり、自分のわからなさに気付いたりして、その喜びをお互いに共有することができる関係

（1）男女混合　４人グループ　を入れる

＊グループ学びと班学習の違い

グループ学び	班学習
・互いの考えを聴き合うことが第一	・必ずしも全員の考えを聴かなければととらえるわけではない。
・すべての子どもの考えを聴こうと意識する。	・雄弁な子どもがことばの大半を独占することもある。
・一人ひとりが自分の考えを聴いてもらう。	・班としての考えを見つけ出すことを目的にしていた。

・考えをまとめたり、ある特定の考えに絞ったりしようとしない。 ・互いの考えを聴き合い、擦り合わせることにより、一人ひとりが自分の考えに磨きをかけて深めていくことを目的とする	・班の誰かが班の考えとして発言することがほとんど。 ・考えをまとめようとする。

（２）ペア学び・グループ学び・全体学び

＊臨機応変に取り入れる。

（３）「聴き合う教室」をめざす

○「聴く」ということは、相手の言葉、そして言葉の内にある考えを受け取るということ。そして、相手を認め、大切にするということ。

「協同的学び」が成立する三つの要素

真正の学び（教科の本質に関した学び）

▲

学び合う関係
（聴き合う関係）

ジャンプのある学び（教科書を超える高いレベルの学び）

① 教師も子どもも　とにかく「聴こうと意識する」ところから始める。

②受動的な「聴く」から能動的な「聴く」へ

＜受動的な「聴く」＞　　→　「聴き方」の指導　をしている

（例）「おしゃべりしないできききましょう」
「話す人のほうを向いて、その人の顔を見てききましょう」
「しっかりききましょう」

☆外見的な態度であり、ある意味マナーのようなもの

＜能動的な「聴く」＞　　→　考えて聴くようにする
＊容易なことではない
「聴き方の達人」

☆教師の意識を変える

①多弁を慎む

〇教師がすぐにしゃべってしまう習性を克服する。

（例）・子どもの語ったことに対して、他の子どもが反応する前にその子のことばを繰り返して言ってしまう。

・子どもの考えを十分きかずに説明してしまう。

・教師の都合のよい方向に誘導してしまう。

〇間が必要

②発言優先主義から抜け出す

〇発言を促す指導がいけないというわけではない。

〇発言を増やすために聴くのではない。

〇聴きたい、聴くことがおもしろい、聴いてみんなで考えていきたいという意識を教師が率先してつくり出す。

（例）「発表してください」→　「聴かせてくれる？」「教えて？」

「聴く」意識を強くする

③聴き上手な教師

〇話しやすい雰囲気　＝　信頼感

「先生はどんなことでもちゃんと聴いてくれる」

「多少ずれていても、間違っていてもちゃんと向き合ってくれる」

「ことば足らずで話しても、意味づけをしてくれる」

〇褒める

「～さんの～という考えを聴いて〇〇さんはこんな疑問を感じたんだね。その疑問いいねえ！」

「～さんの言いたいことを自分の言葉に置き換えて説明できたね。友達の言いたいことが何なのか、考えながら聴けた証拠だね。」

（４）コの字型の教室

・聴き合い、一緒に学ぶ教室

・あまり大きなコの字にしない方がよい。

机をよせた方が、みんなの声が小さくてもきこえるので騒がしくならない。

低学年は、特によせた方がよい。

（５）教師の役割

① 聴く　教師の仕事は、「聴く」（菊）と「待つ」（松）

教師が聴き上手だと、子どもも聴き上手になる。子どもの言葉を否定せず、肯定する。

② つなぐ

・「どこからそう思ったの？」（「どうして？」と問うのではない。）

・３つの対話：教材との対話（つながり）、他者との対話、自己との対話

② もどす

発言がなくなったり子どもたちの中に混乱や迷いがあらわれた時は、教材や前の発言者の考えにもどって考える。

（６）「共有の課題（基礎的な課題）」と「ジャンプの課題（ジャンプの課題）」

「共有の学び」と「ジャンプの学び」が一連のものとして、一時間、あるいは①単元の中に存在することで、子どもたちの学びの定着が図られたり、学びが大きく伸びたりする。

①「共有の課題」とは

・男女混合４人グループ等で、この先に続く、ジャンプの学びで質の高い課題に取り組むために、必要な基盤となる知識や考えを確認し、共有していく学び。

・どの子にも定着が必要とされる、教科書レベルの基礎・基本のもの

②「ジャンプの課題」とは

・一人で到達できるものではなく、他者の援助によって到達できる課題とそれによる学び。

・学級の誰もが解けそうで解けない課題に挑戦するのがジャンプの学びであり、そのための課題がジャンプの課題である。

・何名かの子どもたちが、何の学びもなくすぐに解けるほどのレベルではいけない。が、いつまでたっても、誰も解けないというほど高度であってもいけない。

→子どものつまずきや困り感といったものをしっかりと見とる目が必要。

子どもたちが行き詰まったとき、それを乗り越えるための「足場かけ」が必要

☆教師の子どもを見取る目と教材研究

（７）真野北っ子　学び合いの授業

◎「考えてもわからない」ときは、「教えて」と言いましょう。
◎「教えて」と言われたら「わかるまで」一緒に考えましょう。
◎友だちの考えをしっかり聴いて、自分の考えを深めましょう。

（８）聴き方の達人・「わからない」の達人

＜聴き方の達人＞

① 話をしている人の方を見る。

・テキスト（教科書）や黒板を見ながら聴くのはよい。

② 聴きながら、心の中でおしゃべりをする。

・「どこでそう考えたのだろう」

・「だれの考えと似ているのだろう」

・「自分の考えと比べてどうだろう」

・「どんなことに困っているのだろう」

③ 聴きながら「わからない」を見つける。

・簡単に「わかった」と言わない

・その人の考えをもっと分かるために「わからないこと」を見つけ、聴き終わったらすぐに質問する。

④ 聴いたあと、話の内容を人に伝えることができる。

・「〇〇さんの話を説明して」と言われたとき、自分の言葉で説明できるようにしておく。

・自分の言葉で説明できないのは、「わかっていない」ということ。

・「もう一回言って」と自分で説明できるまで説明してもらう。

⑤ 聴いたあと、その話についての感想が言える。

・「今の〇〇さんの考えについてどう思う？」ときかれたときに、話ができる。

⑥ 仲間が言葉につまったとき、一緒に考えたり、その続きを想像したりする。

・何もしないで待つのではなく、自分が話しているつもりで、一緒に言葉を考える。

⑦ 仲間から話を引き出す努力をする。

・「〇〇さんが話をしてくれない」と、人のせいにせず、自分から積極的に相手の話を引き出す努力をする。

＜「わからない」の達人＞
わからないは、はずかしいことではない！それが「問い」になり、考えが生まれる。みんなの「わからない」は、宝物！！

① いつも「わからない」を探す。
② すぐに「わかった」つもりにならない。自分に「本当に分かったの？」ときくことができる。
③ 友だちの話を聴きながら「そこがわからない」と言うことができる。
④ 「わからない」ことは、何度も繰り返してきくことができる。
⑤ 「わからない」ことを見つけるとうれしくなる。
⑥ 「わからない」を「わかる」にするために、自分で何かをやってみる。
⑦ 友だちの「わからない」が気になり、知りたいと思う。
⑧ 友だちの「わからない」を、「おもしろいこと考えたね」とほめることができる。
⑨ 友だちに「いい『わからない』を見つけたね」とよく言われる。
⑩ 友だちの「わからない」を見つけることができる。
⑪ 友だちの「わからない」を一緒に考えることが楽しいと思う。
⑫ 「わからない」をしっかりノートに書いて記録している。

＜夢中になって学び合う学びをどうデザインするか＞

いつも意識しておきたいこと

・教師のテンションを下げる

・聴く・つなぐ・もどすが教師の仕事　→　教えるというより学びを支える

・学びの始まりを大切に　→　小テスト、復習から授業を始めない（やるなら、最後）

・共有の学びとジャンプの学びで授業をデザインする

課題が簡単すぎると学びがない。子どもを夢中にさせるのは、ジャンプの課題。ジャンプに取り組むなかで、基礎（共有）を学ぶ。全員が解けるものは、ジャンプにはならない。全体の１／３がわかって終わる程度。とにかく「どんどん入れていきましょう！」

・早い段階（５分以内）に最初のグループやペアを入れるつもりで

一人では、到達できないところが、ペアやグループの力によって到達できる。静かに聴き合う、つぶやきの交流が大切。わかったことの交流は、いらない。聴き合う必要性がないと意味がない。

・低学年は、常にペア、ペア、ペア･･･

発達段階上、グループ学びはできない。ペアの学び、全体の学びを大切にする。
→ペアの学びをたくさん取り入れる。１時間で７～８回。感覚としては、いつもペアでするという意識。
できるだけ机を密着させて、安心感を作る。先生とつながっているという実感が大事。
はじめは、ペアの組み合わせを頻繁に変えてもよい。
ワークシートは、ペアで１枚などにしないほうがいい。一人ひとりの学びを保障するためには、一人１枚あるべき。関わりを作っていく段階であれば、２枚のワークシートをつなげてまん中に置くという方法も一つの手

・グループ学びになったら、教師は透明になって見守る意識を持つ

→子ども同士の関わりを支える役割を忘れない

- どこでグループをやめるか（時間を決めない、様子を見取る）
- 夢中にならない原因は･･･　授業を振り返ってみましょう

① 課題がやさしすぎる

② 教師が邪魔している

③ 学びがすでに終わっている

- 指名の割合は、女子７：男子３　のイメージ

振り返りについて

振り返りのモデルを児童に見せると、具体的にイメージがつかめて書きやすくなる。

例）
・キーワードを決める　・テーマを決める
・自分の考えを書く　　・自分のつまずきを書く
・友達の意見を聴いて、考え方がどのように変わったのかを書く
・友達の考えと、それに対する自分の考えを書く
・根拠を示して書く
・教科日記

教科日記の例（実際の５年児童の記録より）

（算数）

今日の算数では、偶数と奇数のことをやりました。偶数は、０・２・４・６・８で、奇数は１・３・５・７・９でした。まず偶数は、どんな式で表せるかを考えました。５班は、２×□でという式ができました。偶数は２×□で必ず表せることができました。次に奇数はどんな式で表せるかを考えました。５班では、２×□＋１で表すことができると分かりました。次に偶数奇数をどうやって見分けるのかをやりました。５班は、１の位が０・２・４・６・８の時が偶数で、１の位が１・３・５・７・９の時が奇数という考えが出ました。２つ目に、２でわってわりきれたら偶数、割り切れなかったら奇数という意見が出ました。５班で出た意見は２つだったけど、見分け方は３つまでありました。そのうちの①と②は、５班が考えた見分け方と同じ見分け方でした。③の見分け方は、２×□の式で表せられるなら偶数、２×□＋１で表せられるなら奇数という見分け方でした。ぼくは、偶数か奇数かを見分けるときは簡単な①から考えて③までやれたらいいと思いました。

（国語）

今日の国語では、なまえつけてよを読みました。主な登場人物を考えました。私は、春花と子馬だと思っていたけど、春花と勇太でした。なぜ春花と子馬じゃないのかなと思いました。考えてみたら、子馬に名前をつけるというのは出来事で、この出来事が起こる前の関わりをとらえるからだと思いました。つまり、出来事が子馬になまえをつけるということでした。この他にも、春花と勇太がすれちがったこと、子馬がよそにもらわれることになったということが出来事だという人もいました。私は、〇〇さんと同じで春花が子馬の名前をつけてとたのまれたことだと思いました。理由は、子馬に名前をつけるというきっかけがなければ春花と勇太は仲良くならないと思うからです。あと、出来事の前・後の関わりは、春花は勇太とあまり仲良くなかった（前）２人は最初よりも仲良くなった（後）と書きました。これからは、意見を考えたら、皆の前で手をあげて言いたいです。また、もっとちゃんと教科書を読み込んで、出来事や登場人物の関わりをとらえたいと思いました。